

第273回 今月読んだ本

福本和夫 思想の再解釈

—「福本イズム」から「日本ルネッサンス史論」へ（26、完）

第11章 「日本ルネッサンス史論」以降—晩年の福本 (1970—1983)

5 生活

福本は、1942年4月24日に出獄してから1983年11月16日に死去するまで、著述業を貫いた。ヨーロッパ留学前後に就いていた学校の教師にはならなかった。留学期間を除くと、「給料取り」であったのは89年の生涯の中でわずか2年余りに過ぎない。

福本は清貧な生活を送らざるを得なかった。本郷の菊富士ホテルに逗留できたのは初期3部作がよく売れて印税収入があったからである。敗戦後の食糧難とインフレは無収入の生活を立ち行かなくさせる。『資本論』初版（原書）など留学から持ち帰った大量の本を売ってなんとか生活を続けた。

石見尚は回想する。

かれのようなかたい社会科学にかんする著述の出版条件が悪い時代には、印税収入をえて生活することの苦しさは、並たいていのことではなかった。僅かな稿料が入ると、喉から手が出るほど欲しい資料や文献を本屋に注文した。時には、「娘には内緒だよ」と言いながら、「マルクス主義公論」の印刷費を私に手渡してくれたりもした。したがって、生活は無駄を省き、きわめて質素であった。それがかえって健康によかったのかもしれない。（前掲『福本和夫』208—209頁）

娘の逸子は、1942年8月に父、弟の邦雄とともに上京してから和夫が没するまで、ずっと父の生活を支え続けた。

逸子は「父・福本和夫とともに生きて」（前掲『裸像』245—262頁）、「父福本和夫の晩年」（前掲『福本和夫の思想』454—458頁）の中で藤沢での晩年を描いている。

福本は原稿執筆のとき下書きも清書もしない。トイレで構想を練り、頭の中で出来上がっているものを一気に書く。手許に残す原稿を書き写すのが逸子の日課だった。

「米食は頭が痛くなる」と言って主にパンとコーヒーの食事だった。乳製品や果物も好きだった。煙草も吸わず体質的に酒も飲めない。とても冷え性で夏でも靴下をはいていた。四畳半の部屋に大き

な掘炬燵を特注して、午前中から夕方近くまで原稿を執筆する。周りに音が出るものがあると原稿が書けないらしく、静かで日当たりがよく富士山や海を眺めることのできる和室はお気に入りの場所だった。夜は大好きな西部劇を遅くまで観る。

庭には柿、イチジク、梨など食べきれないほどの果物が実っていた。植物も大好きで庭の木は自然のままを好み、枝すら切らせない。逸子が父の留守中に剪定すると、すぐに気づいて怒られた。また、祖父と同様に虫を殺さなかった。蚊に刺されてもじっとしていたという。世間話をするのが苦手で散髪屋へはとうとう行かず、逸子がバリカンで調髪をした。待合室で待つのが嫌いで歯医者も苦手だった。医者に行くのも腰が重くて逸子は苦勞する。留学前に身体検査があり、医者に「心臓が弱いから留学はやめた方がいい」と言われたが元気で2年半を過ごした。医者のいうことは当てにならないから、と言うのであった。

福本は決して「世捨て人」ではなかった。福本の業績は忘れられていなかった。古希を迎えてからの講演、展覧会などを挙げてみよう（既出も含む）。

1966年9月、倉吉市で「福本和夫、引田逸牛二人展」開催。11月には専修大学で講演「社会主義運動雑感」、12月には藤沢市図書館で講演「私の日本文化史研究について」、1967年7月には茅ヶ崎文化講座で講演「私の浮世絵研究について」を行う。1967年10月、朝日放送テレビの「日本この百年―吹きまくる弾圧の嵐」に出演。1970年4月、松江高校の同窓会に参加し、萩で幕末の反射炉を見学した。

1972年10月から11月にかけて、藤沢市中央図書館で「福本和夫先生著作四十八年展」開催。1973年12月には東京神田・学士会館で『毛沢東思想の原点』刊行記念会が開かれる。1976年には「福本和夫著作活動50周年記念」集会在開催された（清水多吉、廣松渉らの発案、発起人代表は城塚登）。1977年3月、藤沢江ノ電デパートで「福本和夫書道展」、10月には江ノ電デパートで「福本和夫ふくろう展」（約300点出品）と「福本和夫著作50年展」が開催。この頃から、疲労のためか風邪をひいたり筋肉痛が出たりと体が弱りはじめたという。バスが嫌いでかなりの距離を歩いていた福本は背骨が曲がってよく歩けなくなった。

1978年6月、NHK番組「日曜美術館―前田寛治」に出演し、1979年3月にはNHK番組「私の自叙伝」で「獄窓14年」を語った。同年11月から12月にかけて開催された「前田寛治没後50年記念展」（新宿・小田急百貨店、兵庫県立近代美術館）に福本和夫像を出品する。

1980年10月には江ノ電デパートで「書とふくろう展」、

1981年7月には米寿を祝う会が藤沢の時宗総本山・遊行寺の書院で開催される。同年10月、鳥取県北条町（現北栄町）中央公民館で「福本和夫米寿、引田逸牛卒寿いとこ展」、1983年8月には藤沢市文書館で「福本和夫のすべて展」が開催された。

前田寛治の絵を収集している鳥取県立博物館の学芸員が何度も自宅を訪れた。福本の肖像画を寄贈してほしい、との依頼である。福本は「自分が亡くなってから」と断り続ける。絵を見るたびに親友を思い出していたのではないか。絵を手放すと友がいなくなるような気がしていたのかもしれない。

1983年4月には福本は食事ができなくなる。11月16日、肺炎のため自宅で死去する。享年89。無宗教の福本は生前に「墓は絶対つくらない。あとの者が困るから」と言っていた。遺骨は市営墓地に埋葬された。

福本は故郷でも顕彰され続けた。

『福本和夫著作集』全10巻の完成を受けて、2008年から2011年にかけて鳥取県北栄町図書館では「福本和夫を識る」講座（第1回「福本和夫と郷土」、第2回「福本和夫の生きた時代」、第3回「福本和夫と柳田國男をつなぐもの—低い目線でものを見ること」）が開催される。

2015年には、北条歴史民俗資料館（北栄町みらい伝承館）に福本が集めたフクロウの置物、絵画、彫刻など約1000点が寄贈された。同年11月、遺骨が藤沢市営墓地から実家の墓に納骨される（2026年1月5日付『日本海新聞』VOICE欄、高取正人のコーナー）。

2017年10月から11月にかけて、北栄町みらい伝承館で「福本和夫ふくろうコレクション展～福本和夫が愛したふくろう五郎助～」が開催された（高取正人『人間疎外の時代—革命家・福本和夫の真実』小取舎、2025年、149頁）。

逸子は福本の生前から遺品、草稿、蔵書などをどこに寄贈しようかと考えていた。1976年に蔵書約4000冊を永久保管ができない藤沢市文書館に一時的に寄託した。ちょうどその頃、長洲一二知事（マルクス経済学者、1919-1999、知事在任1975-1995）は県立神奈川近代文学館（1984年開館）を設置する構想を練っていた。逸子は準備会に出向き、日本近代文学の研究者で初代館長となる小田切進（1924-1992）に寄贈を提案し、「福本和夫文庫」として収蔵されることになる。

1989年、神奈川近代文学館は『福本和夫文庫目録（収蔵文庫目録5）』を刊行する。福本和夫の蔵書、原稿、書簡などの目録である。収録点数は特別資料3155点（原稿156点、書簡2403点、その他の資料596点）、図書2321点 2747冊（うち、著書・作品収録図書71点・77冊）、雑誌47誌・169冊。主な資料

は、ライフワークの『日本ルネッサンス史論』の原稿・草稿、獄中ノート、『日本近世の文化革命』などの原稿・草稿、福本和夫宛て書簡、書、遺品など、そして著書、執筆のための参考図書、執筆誌を中心とした雑誌となっている。

福本イズムから日本ルネッサンス史論へ。表層だけを眺めると、福本は思想的立場を大きく変えたように見える。戦前の左翼思想家が戦後に復古主義へ鞍替えすることは珍しくない。福本もその一人だろう。そう考える人は少なくないはずである。

本稿で論じてきたように、福本イズムが日本ルネッサンス史論へ収束していく道行きには通奏低音が静かに響いている。「自主性・人間性の回復へ」、それである。福本は「転向」していない。

福本は自身の思想を踏み台にしてほしいと願っていたはずである。日本近世、近代、現代を俯瞰する新たな思想の誕生が望まれるのである。

あとがき

本稿は、橋田邦彦論（『橋田邦彦・アーレント・現象学—生活世界における公共性と倫理』2023年、小取舍）、宇沢弘文論（『宇沢弘文「社会を治す」—社会的共通資本の再解釈』2024年、小取舍）に次ぐ思想家シリーズの第3弾である。橋田、宇沢、福本に共通するのは鳥取県出身であることだ。出身地はそれぞれ倉吉町（現倉吉市）市、米子市、下北条村（現北栄町）である。

3人の政治的・思想的立場は大きく異なる。「右」とか「左」とかいった思想的分類がもはや有効とは思えないが、あえてレッテルを貼ってみよう。橋田は結果的に「右」、宇沢は真ん中より少「左」（リベラル）、福本は「左」となる。

医学者であった橋田は、本人の思いや意図に反する形で政治に翻弄され、第2・3次近衛文麿内閣、東條英機内閣の文部大臣に就任する。宇沢はよりよき資本主義社会を求めて理論構築（「社会的共通資本」論）に邁進する一方で、成田空港問題を調停するために自民党の大物である後藤田正晴（1914—2005、警察庁長官、官房長官、副総理などを歴任、「カミソリ後藤田」と呼ばれた）に力を借りる。福本は一貫してマルクス主義者である。

なぜ、筆者は3人について論じようと思ったのか。同郷の思想家であること。これだけでは「なぜ、この3人なのか」の理由にはならない。筆者が3人に惹かれたのは、橋田、宇沢、福本の前半生と後半生の間にかわめて大きなギャップ（思想的にも境遇も）があることに気づいたからである。中でも、福本の生涯と思想の変遷には

魅入られた。福本は底なしのクレヴァスをみごとに越えていった。ぜひとも生涯にわたるそのプロセスを語らなければならない、と考えたのである。

個人的な思い出をお許しいただきたい。

筆者が小学生の頃、福本の生家がある田井集落から南に3キロほどのところにある母方の祖父母の家によく遊びに行っていた。仏壇の続きの間には福本和夫が墨で描いた色紙サイズのフクロウの絵、応接間には前田寛治が庭の木を描いた子どもの背丈くらいある絵が飾ってあった。1903年生れの祖父から福本和夫や前田寛治のことを何度も聞いたはずだが、全く覚えていない。

あれから半世紀以上が経った。今でも「福本＝フクロウの絵、前田＝暗い絵」のイメージが時折鮮明によみがえってくる。祖父母宅はすでに取り壊された。広い敷地はソーラーパネルで埋まっている。福本と前田の絵の消息を、私は知らない。

本稿を書こうと思い立ったのは前著『宇沢弘文』刊行後の2024年の秋である。しかし、ここ数十年、福本和夫や前田寛治のことをもっと知りたいと潜在的に思い続けてきたような気がする。あの2つの絵が遠因なのかもしれない。

本稿は定有堂書店ホームページ (<https://teiyu.na.coocan.jp/>) に2025年10月から2026年4月まで掲載された「福本和夫思想の再解釈」(全26回)である。元定有堂書店店主の奈良敏行さんには心から感謝を申し上げたい。

2026年4月

参考・引用文献

*福本和夫の著作など

復刻自註 福本初期著作集	こぶし書房	
第1巻 社会の構成並に変革の過程		1971年
第2巻 経済学批判の方法論		1971年
第3巻 無産階級の方向転換		1972年
第4巻 未発表 獄中ノート抄		1972年
福本和夫著作集	こぶし書房	
第1巻 マルクス主義の理論的研究Ⅰ		2010年
第2巻 マルクス主義の理論的研究Ⅱ		2010年
第3巻 初期文化史研究		2008年
第4巻 農林業論		2009年
第5巻 葛飾北斎論		2008年
第6巻 中国思想の位相論		2009年
第7巻 カラクリ技術史 捕鯨史		2008年

- 第8巻 獄中思索 私の辞書論 2011年
- 第9巻 日本ルネッサンス史論 2009年月
- 第10巻 自主性・人間性の回復をめざして 2010年
- 史的唯物論者の見た梟 出版東京 1952年
- 梟と人生 マルクス主義公論 1969年
- 日本ルネッサンス史論から見た幸田露伴
法政大学出版局 1972年
- 革命回想 (再編集・復刻) インタープレス
- 第1部 非合法時代の思い出 1977年
- 第2部 昭和の大獄 1977年
- 第3部 自主性・人間性の回復をめざして 1977年
- 日本捕鯨史話 新装版 法政大学出版局 1978年
- 書のたのしみ 日本ルネッサンス研究所 1980年
- フクロウ私の探梟記 法政大学出版局 1982年
- 日本ルネッサンス史論 (復刻) 法政大学出版局 1985年
- 福本和夫自伝Ⅰ 革命は楽しからずや一回顧録・霧笛篇 (復刻)
こぶし書房 2003年
- 福本和夫自伝Ⅱ 革命運動裸像—非合法時代の思い出 (復刻)
こぶし書房 2004年
- 福本和夫稿 伯耆北條地方の訛言・方言・略語考 (柳田國男の読後メモ付き)
鳥取県北栄町教育委員会編集 2012年
- NHK わたしの自叙伝 21 (政治2) 福本和夫・太田薫
福本和夫「獄窓十余年」 (1979年3月15日、CD27分7秒)
NHKサービスセンター 2012年

*福本和夫の蔵書など (目録)

- 福本和夫文庫目録 (収蔵文庫目録5) 神奈川近代文学館 1989年
内容、収録点数、主な資料については第11章第5節を参照

*福本和夫論

- 私家版『福本和夫研究—著作50年から見たその人と業績の一端—』
高野進、第1集 (1975年)、第3集 (1976年)、第4集 (1976年)、第5集 (1983年)
- しまねきよし・清水多吉『評伝・福本和夫』思想の科学社、1988年
- 小島亮編『福本和夫の思想—研究論文集』こぶし書房、2005年
- 石見尚『福本和夫—『日本ルネッサンス史論』をめぐる思想と人間』論創社、1993年
- 石見尚『我々ハ犯罪者ニ非ズ—講座 福本和夫論』文芸社、2010年

高取正人『人間疎外の時代—革命家・福本和夫の真実』小取舎、2025年

***その他の著作 (引用・参考の著者順)**

- 小林多喜二『転形期の人々』1931-1932年、『日本プロレタリア文学集・27 小林多喜二集(2)』新日本出版社、1998年、157-309頁、所収
- 小林多喜二『蟹工船、一九二八・三・一五』岩波文庫、1951年
- 小林多喜二『防雪林・不在地主』岩波文庫、2020年
- フィールド『小林多喜二—21世紀にどう読むか』岩波新書、2009年
- 中野重治『むらぎも』1954年、講談社文芸文庫、1989年
- 久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想—その五つの渦—』岩波新書、1956年
- 鶴見俊輔『戦時期日本の精神史—1931~1945年』—岩波書店、1982年
- 荒川幾男『昭和思想史—暗く輝ける1930年代』朝日選書、1989年
- 丸山眞男『日本政治思想史研究』1952年、新装版、東京大学出版会、1983年
- 丸山眞男『日本の思想』岩波新書、1961年
- 丸山眞男『現代政治の思想と行動』未来社、1964年
- 丸山眞男『忠誠と反逆—転形期日本の精神的位相—』筑摩書房、1992年
- ルカーチ『歴史と階級意識』1923年、白水社、城塚登・古田光訳、1975年
- ルカーチ『生きられた思想—対話による自伝』1980年、白水社、池田浩士訳、1984年
- コルシュ『マルクス主義と哲学』1923年、未来社、平井俊彦・岡崎幹郎訳、1977年
- 清水多吉『1930年代の光と影—フランクフルト学派研究』河出書房新社、1986年
- 清水多吉『柳田國男の継承者 福本和夫—「コトバ」を追い求めた知られざる師弟の交遊抄』ミネルヴァ書房、2014年
- メルロ＝ポンティ『弁証法の冒険』1955年、みすず書房、滝浦静雄・木田元ら訳、1972年
- ジェイ『弁証法的想像力—フランクフルト学派と社会研究所の歴史1923-1950』1973年、みすず書房、荒川幾男訳、1975年

ジェイ『マルクス主義と全体性—ルカーチからハーバーマスへの概念の冒険』1984年、国文社、荒川幾男・今村仁司ら訳、1993年

宇野弘蔵『資本論五十年（上巻）』法政大学出版局、1970年

前田寛治『寫實の要件』1965年、中央公論美術出版、1999年

戸坂潤『日本イデオロギー論』1935年、岩波文庫、1977年

戸坂潤『科学方法論』岩波書店、1929年

近藤富江『本郷菊富士ホテル』1974年、中公文庫、1983年

福本邦雄『表舞台 裏舞台—福本邦雄回顧録』講談社、2007年

北原保雄編『明鏡国語辞典（携帯版）』大修館書店、2003年

西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編『岩波 国語辞典（第4版）』岩波書店、1986年

小林英夫『昭和ファシストの群像』校倉書房、1984年

内田樹『権藤成卿の人と思想 日本型コミュニズムの擁護と顕彰』K&Kプレス、2025年

片山杜秀『近代日本の右翼思想』講談社選書メチエ、2007年

伊藤晃『天皇制と社会主義』勁草書房、1988年

マルクス『経済学批判』1859年、岩波文庫、1956年

ブハーリン『史的唯物論—マルクス主義社会学の一般的教科書』1921年、青木書店、1974年

小澤光利「いわゆる「プラン問題」再考」法政大学学術機関リポジトリ『経済志林』第77巻第3号、法政大学経済学部学会、2010年、415—425頁、所収

和田春樹編訳『レーニン・コレクション』平凡社ライブラリー、2024年

山川均「無産階級運動の方向転換」1923年、『山川均全集 第4巻』勁草書房、1967年、336—345頁、所収

佐々木太郎『コミンテルン—国際共産主義運動とは何だったのか』中公新書、2025年

石堂清倫・五味川純平『思想と人間—革命の虚像と実像』角川書店、1974年

中北浩璽『日本共産党—「革命」を夢見た100年』中公新書、2022年

日本共産党中央委員会『日本共産党の百年 1922—2022』新日本出版社、2023年

池上彰・佐藤優『黎明 日本左翼史—左翼の誕生と弾圧・転向 1867—1945』講談社現代新書、2023年

池上彰・佐藤優『真説 日本左翼史—戦後左翼の源流 1845—1960』講談社現代新書、2021年

池上彰・佐藤優『激動 日本左翼史—学生運動と過激派 1960—1972』講談社現代新書、2021年

池上彰・佐藤優『漂流 日本左翼史—理想なき左派の混迷 1972—2022』講談社現代新書、2022年

松尾匡『新しい左翼入門—相克の運動史は超えられるか』講談社現代新書、2012年

平山周吉『天皇機関説タイフーン』講談社、2025年

中澤俊輔『治安維持法—なぜ政党政治は「悪法」を生んだか』中公新書、2012年

萩野富士夫『検証 治安維持法—なぜ「法の暴力」が蔓延したのか』平凡社新書、2024年

萩野富士夫『思想検事』岩波新書、2000年

萩野富士夫『特高警察』岩波新書、2012年

内務省研究会編『内務省—近代日本に君臨した巨大官庁』講談社現代新書、2025年

立花隆『日本共産党の研究(1)～(3)』1978年、講談社文庫、1983年

石堂清倫・山辺健太郎編『コミンテルン 日本にかんするテーゼ集』青木文庫、1961年

「日本共産党関係雑件／共産党事件被告人予審調書」 「第2巻2」
「福本和夫 分割1」手書き、868—1064頁、所収
「福本和夫 分割2」手書き、1065—1264頁、所収
「福本和夫 分割3」手書き、1265—1306頁、所収
国立公文書館アジア歴史資料センター・デジタルアーカイブ

「福本和夫聴取書(1928)」、『現代史資料20 社会主義運動7』みすず書房、1968年、299—326頁、所収

「徳田球一、志賀義雄、福本和夫に対する予防拘禁事件記録」、奥平康彦編『昭和思想統制史資料 共産主義・無政府主義者3』生活社、1980年、201—427頁、所収、国立国会図書館デジタルコレクション

松本清張「3. 15 共産党検挙」1965年、『昭和史発掘2』文春文庫、2005年、7—113頁、所収

辻参正「法廷心理學の研究(特に共産黨被告人の法廷心理)」、『司法研究 第15輯 報告書集5』司法調査課、1932年、1—186頁、所収、国立国会図書館デジタルコレクション

思想の科学研究会編『共同研究 転向1—戦前篇 上』1959年、平凡社東洋文庫、2012年

佐野学・鍋山直親『共同被告同志に告ぐる書』1933年、『佐野学著作集 第1巻』佐野学著作集刊行会、1957年、3—20頁、所収、国立国会図書館デジタルコレクション

鶴見太郎『柳田国男とその弟子たち—民俗学を学ぶマルクス主義者』人文書院、1998年

鶴見太郎『橋浦泰雄伝—柳田学の大いなる伴走者』晶文社、2000年

鶴見太郎『民俗学の熱き日々—柳田国男とその後継者たち』中公新書、2004年

橋浦泰雄『五塵録』創樹社、1982年

藤谷俊雄『「おかげまいり」と「ええじゃないか」』岩波新書、1968年

東京国立博物館『北斎展 HOKUSAI』日本経済新聞社、2005年

大久保純一『カラー版 北斎』岩波新書、2012年

日野原健司編『北斎 富嶽三十六景』岩波文庫、2019年

野呂栄太郎『初版 日本資本主義発達史』1930年、岩波文庫、全2巻、1983年

山田盛太郎『日本資本主義分析—日本資本主義における再生産過程把握』1934年、岩波文庫、1977年

政治問題研究会編『日本共産党綱領問題文献集（上）』青木文庫、1957年、国立国会図書館デジタルコレクション

小山弘健『戦後日本共産党史—党内抗争の歴史』1958年、こぶし書房、2008年

松永智子『米原昶の革命—不実な政治か貞淑なメディアか』創元社、2025年

子安宣邦『江戸思想史講義』岩波書店、1998年

子安宣邦『方法としての江戸—日本思想史と批判的視座』ペリカン社、2000年

木下靖二・佐藤次高・岸本美緒『詳説 世界史B』山川出版社、2014年

巻島隆『飛脚は何を運んだのか—江戸街道輸送網』ちくま新書、2025年

ノーマン『忘れられた思想家—安藤昌益のこと—』岩波新書、全2巻、1950年

岩田直樹『橋田邦彦・アーレント・現象学—生活世界における公共性と倫理』2023年、小取舎

岩田直樹『宇沢弘文「社会を治す」—社会的共通資本の再解釈』2024年、小取舎